

日本における郭沫若の紹介・研究 90 年（試論）※

岩佐昌障

日本における郭沫若研究を概観したものとしては、武継平による仕事がある。これは 1919 年から 1987 年までの約七十年間に日本で（戦前のものは一部大陸や旧植民地刊行の日本人発行雑誌で）発表された、郭沫若に関する文献資料 397 を収集し、1）作家論・作品論、2）翻訳作品、3）郭沫若の日本語作品、4）その他、5）事典等収録の資料、の 5 項目に分類した文献目録（「日本における郭沫若研究の文献目録」、およびそれらの文献からうかがえる研究動向の歴史的軌跡の考察（「解説・日本における郭沫若研究について」）から成る¹。収録された文献総数は、日本における 80 年代末までの郭沫若研究をほぼ概観するには十分な数であろう。「解説」の中で、武継平はまず郭沫若の文学生涯を第一時期（1914～37 年）、第二時期（1937 年 7 月～49 年 10 月）、第三時期（1949 年～78 年 6 月）、第四時期（没後～87 年。ただし単行本については 93 年までの文献を収録）に区分する。そしてその上でこれらの文献を、A）作家のプロフィール、創作活動、作家の動向など。B）作家訪問記、インタビュー、対談録、回想記、関連随筆など。C）作品概要の紹介、書評、作品論など。D）作家論（学者・専門家の書いた作家論）など。E）翻訳作品（郭沫若の作品および関係研究論文の日本語訳）など、の 5 種類に分け、各時期の研究動向を考察している。

この他に郭沫若もふくむ日本における中国現代文学の研究状況について論じた文献に、阿部幸夫・松井博光編『中国現代文学研究の深化と現状』²、坂口直樹「現代中国文学研究の五十年」³がある。前者は 1977 年から 87 年の十年間に日本で発表された文献の目録、後者は 1949 年から 2000 年までの日本における中国現代文学研究を、先行文献を整理しながら総括したものであり、研究の大体の傾向を知るには有用である。また 1978 年以後の文献（研究論文、紹介、報道記事をふくむ）については現在、岸田憲也による文献目録の作成が進んでいる⁴。

本報告は、これらの労作を参考にしながら、現在までの研究の動向を概観するが、時期区分を、武継平の区分と異なり、郭沫若自身の文学活動や政治家としての活動に則して区切り、彼の活動が彼を対象にした文献にどのように反映されているかを見たいと思う。そこで、文献の発表時期を、第 1 期＝留学時期から 1928 年日本亡命まで、第 2 期＝日本亡

小稿は 2009 年 8 月 27-28 日にアメリカ合衆国 Johns Hopkins University で開催された IGMA (International Guo Moruo Academy) 第 1 回大会における中文報告（「日本郭沫若研究・紹介の九十年」『Proceeding of International Guo Moruo Avademy』pp.1-11 所収）の日本語原稿である。掲載に当たって注を増やすなど部分的改変を加えた。

¹ 武継平『異文化の中の郭沫若—日本留学の時代』九州大学出版会、2002 年 12 月、に付録として所収。

² 阿部幸夫・松井博光編『中国現代文学研究の深化と現状—日本における中国文学（現代／当代）研究文献目録 1977—1986』東方書店、1988 年 2 月。

³ 坂口直樹「現代中国文学研究の五十年」『中国現代文学の系譜—革命と通俗をめぐる』2004 年 2 月に所収。初出は現代中国学会誌『現代中国』第 75 号、2001 年 10 月。

⁴ 岸田憲也「近 20 年の日本における郭沫若研究・紹介・雑誌記事目録（未定稿）」（『Proceeding of International Guo Moruo Avademy』pp.267-281 所収）。

命期間、第3期＝抗日戦争、国共内戦を経て中華人民共和国成立まで。第4期＝中華人民共和国成立から文革まで、第5期＝文革から逝去まで。第6期＝郭沫若逝去以後（1978年～89年）、第7期＝90年代、第8期＝2000年以後、現在まで、のように区分して考察する。

第1期（1914～28）

詩人としての郭沫若が日本に紹介されるのは早くも1919年のことである。『日華公論』（天津、日華公論社）1919年10月号に訳載された「抱児浴博多湾」「鷺」で、これが郭沫若作品の日本語訳の最初のものである。次いで、22年には大西斎、共田浩編訳『文学革命と白話新詩』東亜公司（北京）にも彼の詩が収録されている。だが『日華公論』は天津の雑誌、東亜公司も北京の出版社である。日本ではまだ無名であった郭沫若が、中国国内では知られつつあったという事情を反映していたと考えられる。ともあれ1919年と22年という早い時期に郭沫若の作品が翻訳紹介されていたという事実は、郭沫若研究史において銘記されるべきことである。

郭沫若が日本のジャーナリズムで紹介され始めるのはだいたい第1時期の1926年からである。26年、谷崎潤一郎が「文芸春秋」5月号に彼を紹介（「上海見聞録」）し、山田清一郎、藤枝丈夫のような左翼作家が「戦旗」（日本無産者階級芸術連盟機関誌）28年7月号に紹介の文章を書いた（山田「支那の二作家を訪ねて」、藤枝「中国の新興文芸運動」）。また作品の本格的紹介もこのころからで、主には「新天地」（新天地社、大連）、「満蒙」（中日文化協会、大連）、「北京週報」（極東新信社、北京）といった大陸で発行されている雑誌や、「日支」（日支問題研究会）、（同仁会）のような中国に関心をもつ雑誌、「支那哲文雑誌」（東京帝大支那哲文学学生会）や東京外国語学校、大阪外国語学校の文芸部会誌などに掲載されていた。だが1926年には戯曲「王昭君」が「改造」8月号に訳載されるなど、当時の一流雑誌も彼に注目しはじめている。

第2期（1928～37）

28年以後は日本で亡命生活を送ったこともあり、作品の紹介が増える。「郭沫若詩抄」（黄瀛訳「詩と詩論」5、厚生閣、29年）、「函谷関」（一二六落花生訳「同仁」5-4 同仁会、30年）、「莊子」（大高岩夫「同仁」6-6、同仁会、32年）、「孟子妻を出す」（広野武敏訳「白楊」1-4、白楊社、36年）、「項羽の自殺」（「歴史科学」5-9、白楊社、36年）といった歴史小品が翻訳された。そして文学だけでなく、歴史学や文字学の成果もこの時期に翻訳出版される。例えば、藤枝丈夫訳『支那古代社会史論』（内外社、31年12月）、田中震二訳『青銅器研究要纂』（文求堂、35年4月）などがその一例である。文学者、歴史学者、文字学者としての郭沫若の名声が定着していく時期である。

第3期（1937～49）

この時期は、抗日戦争および日本の敗戦（1945年8月）後の国共内戦をめぐって、中国への関心がつよまった時期である。『現代支那文学全集』（東成社、40年）や『現代支那文学傑作集』（春陽堂書店、41年）などが出され、それらには郭沫若の作品が収録された。

また小田嶽夫「郭沫若と郁達夫—創造社の二詩人」(「文芸春秋」17-6、39年)、武田泰淳『揚子江文学風土記』(龍吟社、41年)、山口一郎「郭沫若の最近の業績「青銅時代」と「十批判書」」(「中国研究所所報」5、47年)のように、単なる郭沫若紹介ではなく、文学や歴史の視点から彼の業績を位置づけようとするものもあった。郭沫若への関心も、抗日戦争時期には波多野乾一『現代支那の政治と人物』(改造社、37年8月)、「対知識人問題—抗日支那の文化政策」(「都新聞」38年7月)、といった時局論の文脈の中で示されるようになった。国共内戦時期には、須田禎一「中国を担う人々(一) 郭沫若」(『随筆中国』日華文化会、47年4月)、吉田東裕「郭沫若の蘇聯紀行」(「中国文化」中国文化協会、47年)のような国共内戦の帰趨に注目したものがみられる。

第4期(1949～66)

第三時期は、日本で言えば、革命を成功させ社会主義国家として新生した中国への関心が高まり、それにともなって中国現代文学にも強い関心が寄せられた時期である。

知日派知識人で新政権の副総理の地位についた大物政治家・郭沫若に対しても、日中関係の閉塞状態を打破し、発展させてくれるだろうという期待が、日本の各界にみなぎっていた。郭沫若もその期待に応え、日本からの各界の友好訪中団を幅広く接見し、日本で最もよく知られる中国人の一人となった。55年12月には中国学術代表団団長として訪日、各地で熱烈な歓迎を受ける。この年から翌年にかけて新聞雑誌には彼と交流のあった人々の随筆が多く書かれている。

こうした状況を背景に、郭沫若の作品の翻訳、紹介が進んだ。53年には小峰王親・桑山龍平共訳『郭沫若作品集(上・下)』(青木書店、12月)が出版され、郭沫若の主要な文学作品が翻訳された。54年『現代中国文学選集』(全15巻、河出書房)、が、62年には『中国現代文学選集』(全20巻、平凡社)、が出版され、前者の第2巻、後者の第5巻、第15巻が郭沫若の小説、伝記等に宛てられた。このほか、須田禎一により詩(『郭沫若詩集』未来社、52年)、戯曲(『屈原』未来社、52年、『虎符』未来社、53年、『蔡文姬』新読書社、59年、『則天武后』平凡社、63年、『棠棣花』海燕社、66年など)が陸続と翻訳された。彼の学術著作としては『十批判書』が野原四郎他訳『中国古代の思想家たち』の題名で岩波書店から刊行(上巻、53年、下巻、57年)され、主要な伝記作品も岡崎俊夫(『亡命十年』(海濤)、筑摩書房、53年、『抗日戦回顧録』(洪波曲)、中央公論社、59年)や松枝茂夫(『「創造十年・続創造十年」岩波文庫、60年、『私の幼年時代・辛亥革命前後・南昌の一夜』平凡社、62年)によって次々に翻訳された。

また研究面でも、学会誌や大学紀要に彼を主題とした研究論文が発表されるようになる。工藤篁「屈原と阿Q」(『現代中国』15、現代中国学会、53年)、服部隆三「郭沫若の小説」(『天理大学学報』5-3、54年)、陣ノ内宜男「郭沫若の『女神』について」(『東洋文学研究』2、早稲田大学、54年)、田仲益見「郭沫若の作品より—孔子、孟子、老子」(『横浜市立大学論叢』6別冊、54年)、中田善勝「一九二四年頃の郭沫若」(『中国文芸座談会ノート』4、九州大学中国文学研究会、55年)、田中巖「郭沫若の戯曲」(『漢文学紀要』5、広島支那学会、56年)、竹内実「郭沫若の歴史劇」(『文学界』13-9、59年)、柴田稔「郭沫若の「蔡文姬」」(『関西大学文学論集』9-8、60年)、清水栄吉「歴史文学における史実と

フィクション—郭沫若の史劇論から」(『中文研究』2、天理大学、62年)、横山永三「郭沫若の詩集「女神」についての私見」(『山口大学文学会誌』13-2、62年)小峰王親「郭沫若年譜」(『法政大学教養部研究報告』7、63年)、高田昭二「歴史劇における郭沫若の創作態度の変化について」(『岡山大学法文学部学術紀要』17、64年)、実藤恵秀「中国文字改革の新段階—郭沫若の所論を中心に」(『文学』32-7、岩波書店、64年)、秋吉久吉夫「郭沫若詩集「女神」の成立過程」(『目加田誠博士還暦記念中国学論集』、64年)など『女神』研究、歴史劇研究を中心にした多彩な論考が現れた。これらの論考はいずれも彼の作品の専論であるが、文学にかぎらず、郭沫若の業績を全体的に捉えようとした論文に、佐藤一郎「郭沫若論序説」(『三田文学』43-8、53年)および「郭沫若」(竹内好・岡崎俊夫編『現代中国の作家たち』和光社、54年)がある。

郭沫若がようやく本格的に現代文学研究の対象となったのがこの時期である。それは、日本の中国現代文学研究がこのころからようやく学術として成熟しはじめたことと軌を一にしていた。

第5期(1966～78)

文革の発動によって日本国内の親中国派が分裂し、文革支持派と反文革派が対立、それが中国文学への評価にも影響する事態が生まれた時期である。この時期の郭沫若研究にとって最も重要な出来事が、66年4月大きく報道された郭沫若の自己批判(「私の著作は焼き捨てよ 郭沫若氏劇的な自己批判」『朝日新聞』4月29日)⁵である。

郭沫若の自己批判に対し日本文化界は激しく反応した。例えば、福田恒存「郭沫若氏の心中を思う」『朝日新聞』5月3日、須田貞一「郭沫若の作品は焼かねばならぬか」『エコノミスト』5月、竹内実「郭沫若の自己批判と文化革命—包囲される中国歴史学」『朝日ジャーナル』5月、荒正人「郭沫若の自己批判」『文芸』7月号、三島由紀夫、川端康成、石川淳、安部公房による「文化大革命に関する声明」67年2月(『三島由紀夫全集』第35巻所収)など、著名な知識人が自己批判をした郭沫若を論じ、それを通して文革を批判した。以下はその声明の一部である。

昨今の中国における文化大革命は、本質的には政治革命である。百家争鳴の時代から今日にいたる変遷の間に、時々刻々に変貌する政治権力の恣意によって学問芸術の自律性が犯されたことは、隣邦にあって文筆に携はる者として、座視するには忍ばざるものがある。／この政治革命の現象にとらはれて、芸術家としての態度決定を故意に保留するが如きは、われわれのとりどころではない。われわれは左右いづれのイデオロギー的立場をも超えて、ここに学問芸術の自由の圧殺に抗議し、中国の学問芸術が(その古典研究をも含めて)本来の自律性を恢復するためのあらゆる努力に対して、支持を表明するものである。／われわれは、学問芸術の原理を、いかなる形態、いかなる種類の政治権力とも異範疇のものと見なすことを、ここに改めて確認し、あらゆる「文学報国」的思想、またはこれと異形同質なるいはゆる「政治と文学」理論、すなはち、学問芸術を終局的には政治権力の具とするが如き思考

⁵ 自己批判の全文は藤本幸三による翻訳がある。「郭沫若自己批判書」『現代の目』7巻7号、66年7月、現代評論社。

方法に一致して反対する。

この事件によって日本では郭沫若が自己保身のために文学者としての節を曲げ、政治に屈服したという見方が広まった。これをきっかけに、文革期および文革後から中国文学の研究を始めた青年世代の研究者からは郭沫若に対する関心が徐々に失われていったのも事実である⁶。

自己批判で評価を下げたにも関わらず、文革期における郭沫若への関心は決して衰えはしなかった。その理由のひとつに 72 年田中角栄が訪中し、日中の国交が回復したことがあげられよう。国交回復後、日本には中国語学習ブームに象徴される中国への高い関心が巻き起こる。そのなかで日中友好の象徴的な人物であった郭沫若が様々な分野で話題になるは当然のことでもあった。

中国文学研究でも郭沫若を取り上げた研究は少なくなかった。なかでも中島みどりの論考（「郭沫若の初期文学論」『吉川博士退休記念中国文学論集』、筑摩書房、68 年、「郭沫若史劇論・序論」『颯風』2、颯風の会、72 年、「郭沫若の小説——一九二〇年代を中心に」『入矢教授、小川教授退休記念中国文学語学論集』、筑摩書房、74 年）、資料（「郭沫若著訳纂年目録」『四天王寺女子大紀要』9、10、11、76 年、79 年）や鈴木義昭の郭沫若詩に関する一連の論文（「「瓶」・「前茅」時代の郭沫若——政治から抒情へ」『東洋文学研究』20、早稲田大学、72 年、「郭沫若『女神』——模索と到達点」『早稲田実業学校研究紀要』9、74 年、「郭沫若「女神」とホイットマン——有島武郎を軸として」『中国古典研究』20、早稲田大学、75 年、など）は、郭沫若研究を大きく前進させるものだったといえる。

翻訳も次々に出された。67 年からは平凡社・東洋文庫から小野忍、丸山昇共訳による『郭沫若自伝』の刊行がはじまり、71 年までに『我的幼年時代』（67 年）『黒猫・創造十年』（68 年）『続創造十年』（69 年）『在北伐途上』（71 年）『続海濤集・帰去来』（71 年）の全五巻が刊行された。72 年には須田禎一による『郭沫若史劇全集』全 4 巻が講談社から出され、73 年には須田による『李白と杜甫』が講談社から出された。同書については 72 年から『李白と杜甫』翻訳集団⁷名義で同人誌『颯風』誌上で翻訳をすすめていた⁷中島みどりが須田の翻訳の誤りを批判するということがあった（「須田禎一氏訳『李白と杜甫』を評す」『颯風』4、73 年）。

さらに画期的なことは 75 年雄渾社から『郭沫若選集』全 17 巻の翻訳が刊行されはじめたことである。この全集がもし完成していたら、日本における郭沫若研究は新たな高みに上ったことだろう。だが、この全集は残念ながら 8 冊（『少年時代』、『創造十年』、『郭沫若詩集』、『史劇Ⅰ 棠棣の花・屈原』、『史劇Ⅱ 虎符・蔡文姬・則天武后』、『屈原研究』、『青銅時代』、『歴史人物』）を出しただけで完結しないままに終わった。全集のうち 4 冊は 80 年代にようやく出版され、1 冊は校正まで終わっていたのに出版されなかった。その事情の一つは、予定していたほど売れなかったということだ⁸。それは 80 年代日本における

⁶ 郭沫若の自己批判そのものを対象にした論考に、武継平「郭沫若の自己批判」『郭沫若研究会報』第 5 号、2004 年 9 月—第 6 号、2005 年 5 月（連載）がある。

⁷ 『李白と杜甫』翻訳集団による翻訳は 72 年 3 月「颯風」創刊号から始まり 87 年 3 月同誌 19 号まで 14 回にわたって続いた。

⁸ この選集の出版から刊行打ち切りまでの経緯については、逝去した須田禎一に代わって編集

郭沫若の文学的地位の退潮を象徴する出来事だが、それについては第6期でまた触れる。

1976年四人組逮捕によって政治運動としての文革は終わる。78年には中国共産党十期三中全会が開かれ、政治の時代から改革・開放の時代への転換を宣言した。まさにこの大転換を目前にした78年6月、郭沫若はその生涯を閉じた。日本のマスコミ各紙は郭沫若のために多くの追悼記事、回想の類を掲載した。『朝日新聞』は吉田実の評伝（「革命に生きた知識人」）のほか、中島みどり（「郭沫若の文学—時代への詩人的直感」）、土岐善麿（「草木には今昔あり、人情には変遷なし」）が、『毎日新聞』は吉川幸次郎（「革命に生き抜いた文人」）が、『読売新聞』は竹内実（「日中文化のきずな郭沫若氏」）が、『サンケイ新聞』は尾崎秀樹（「郭沫若に学ぶ」）が、それぞれ追悼文を書いた。この年の後半に発表された郭沫若関係の文章はそのほとんどが追悼、回想に捧げられている。それらの中では丸山昇の評伝「郭沫若：その一面」（『朝日アジアレビュー』35号、78年9月）が情理兼ね備えて詳しい⁹。

第6期（1978～1989）

郭沫若逝去の78年は、いわゆる新時期文学の出発期でもある。それは同時に中国文学の創作と研究がさまざまなタブーから解放され、これまでにない新しい視点と方法で創作と研究を始めた時期であった。いわゆる文革前十七年と文革期の創作や研究が再検討の対象となった。一口に言えば文学が政治からの自立を獲得していく歩みが新時期文学の歩みだった。中国文学界のこの状況は日本の中国文学研究にも影響を与えた。80年代以後の日本の中国文学界では新時期文学への関心が強まって、新時期文学や文革後再評価された作家や作品の研究・紹介が多くなっていった。日本社会全体の中国への関心も、文革を経て、改革開放を掲げた中国がどう発展していくかという点にあった。その結果、政治的、社会的な問題をその文学上の主題としてきた中国作家や作品は、次第に研究者の興味を引かなくなっていった。こうした状況は2009年の今日でも続いている。

前述の状況を示すデータがある。前掲阪口直樹「現代中国文学研究の五十年」の調査によれば、1945年から77年までの27年間、日本の大学・研究機関所属の中国文学研究者による作家別論文数のベストテンは以下のようである。（）内は論文数。

1位魯迅（644）、2位郭沫若（78）、3位茅盾（76）、4位老舍（72）、5位丁玲（67）、6位趙樹理（56）、7位胡適（34）8位郁達夫（31）、9位巴金（30）、10位李大釗（27）。

ところが文革後の77年から86年になるとその順位は以下のように変わる。

1位魯迅（633）、2位茅盾（95）、3位老舍（87）、4位周作人（43）、5位丁玲（42）、6位郭沫若（30）、7位夏衍（29）、8位蕭紅（28）、9位蕭軍、竹内好（25）、11位郁達夫（22）

これらのデータが示すように、日本の中国文学研究者の間での郭沫若の地位の低下は明らかである。だが、郭沫若研究だけをみると、その研究の質は高まっているように思う。例えば、鈴木正夫（「郭沫若の帰国と郁達夫」『野草』32、中国文芸研究会、83年）、伊藤虎丸（「郭沫若の歴史小説」『東洋文化』65、東大東洋文化研究所、85年）、立松昇一（「創

委員に就任した杉本達夫の回想文がある。杉本達夫「雄渾社版『郭沫若選集』のこと」『郭沫若研究会報』第4号、2004年5月。

⁹ 『日本郭沫若研究会報』3～5号（03～04年）に著者の承諾を得て転載。

造社同人の文学(その 1)—郭沫若の戯曲をめぐって—」『麗澤大学紀要』42、86 年)、小谷一郎(「第一期創造社同人の出会いと創造社の成立—創造社と日本—」『中国文学の比較文学的研究』汲古書院、86 年)など実証的な研究が発表された。翻訳では前述したように雄渾社版『郭沫若選集』の出版が続き、中島みどりら『飄風』グループによる『李白と杜甫』の翻訳も継続した。

また雄渾社版『郭沫若選集』各巻付録「読者のしおり」には郭沫若と交流のあった人々が彼に関する多様なエッセイを発表し、郭沫若像をより豊かにしていく役割を果たした。エッセイと言え、80 年岡田英弘が書いた「日本を愛した中国人—陶晶孫の生涯と郭沫若」(『中央公論』95-12、12 月)と翌年澤地久枝が『文芸春秋』に連載した「日中の懸橋—郭をとみと陶みさを(昭和史のおんな)」(「中国人の妻として昭和を生きたに日本人姉妹(続)—日中の懸橋—郭をとみと陶みさを」(『文芸春秋』4、5、81 年)は、一人の人間としての郭沫若の一面を浮かび上がらせる力作だった。

第 7 期(1990 年代)

前述坂口の調査によれば、89 年から 95 年までの順位は以下になる。

1 位魯迅(216)、2 位周作人(45)、3 位沈從文(38)、4 位老舍(33)、5 位巴金(31)、6 位茅盾(28)、7 位郁達夫(26)、8 位王蒙(17)、9 位胡風(16)、10 位張愛玲(14)、11 位丁玲(13)、12 位郭沫若(10)

郭沫若はベストテンからも転落したのである。だが発表される文献の量は減ったが、質はより深まるという傾向は続いている。その具体的な文献名については、岸田憲也編「日本における近 20 年の郭沫若研究・紹介・雑誌記事目録」(注 4 参照)に譲り、ここではおおよその傾向についてのみ述べることにしたい。この時期に顕著な特徴は、個別の作品や、理論への実証的な研究が増えたことである。その見るべきものとしては、藤田梨那(=林叢)「電火光中」(「郭沫若の新詩『電火光中』論—ミレーの絵画にふれつつ—」1、2、「二松学舎大学人文論叢」56、57、96 年)、「牧羊哀話」(「郭沫若『牧羊哀話』の創作背景とモチーフに関する考察」『清泉女子大学人文科学研究紀要』20、99 年)、など作品論、横打里奈の「女神」に関する論考(「郭沫若研究ノート—《女神》の改訂について」『麦灯』25、二松学舎大学、97 年、「『女神』の版本について」『東洋大学中国哲学文学科紀要』7、98 年など)、武継平の初期郭沫若に関する研究(「異文化の衝突と融合—郭沫若の《女神》とその時代」『比較社会文化研究』3、九州大学、「福岡における郭沫若」『九州中国学会報』36、「郭沫若の『星空』論—“五四”退潮期における苦悶と思索」『比較社会文化研究』4、以上いずれも 98 年、「郭沫若の初期文学論考」『比較社会文化研究』5、99 年)、中井政喜が「『革命文学』論争覚え書」として名古屋大学『言語文化論集』に連載している文学理論研究(「郭沫若『革命与文学』における『革命文学』提唱についてのノート」91 年、「郭沫若と『社会組織と社会革命』に関する若干の考察」(河上肇著)についてのノート」95~96 年)、顧偉良の留学期の郭沫若研究(「日本留学期<1914-1923>の郭沫若—自我の形成と詩の方法に関する一考察—」『紀要』28~29、弘前学院大学・弘前学院短期大学、92~93 年、「郭沫若と『文芸理論』の構想—『創作過程』をめぐって—」『野草』52、93 年、「郭沫若の『文芸理論』の構想—『感応過程』を視座に—」『中国研究月報』49(8)、95 年)などの論考がある。

第8期（2000年～現在）

2000年以後、現在までの研究論文の実際は、やはり岸田の目録を参照していただきたいが、その特徴をいくつかあげておきたい。第1は、前の時期に引き続き、郭沫若の個別の作品や彼の理論への実証的な研究が増え、考察の対象が拡大したこと、およびそれが書物として集大成されるようになったことである。第2に郭沫若研究の専門家ともいえるべき研究者の隊列が生まれていることである。これに関連して、第3に中国人留学生の中から郭沫若研究の専門家が育ちつつあることである。第4に、郭沫若研究者の組織として日本郭沫若研究会が誕生し、中国の研究者との組織的交流が始まったことである。

具体的には、第1の例として、郭沫若の留学時代を中心にした文学、思想、生活を考察した武継平『異文化の中の郭沫若—日本留学の時代—』（九州大学出版会、02年）をあげることができる。これは著者が九州大学に提出した学位請求論文であり、郭沫若を主題にした研究書としては日本最初のものである。このほか、斉藤孝治『シュトルム ウント ドランク—疾風怒濤』上・下（シュトルム・ウント・ドランク編集出版委員会、05年）は詳細な調査に基づく伝記であり、郭沫若伝としては日本最初の書物である。また郭沫若研究の専著ではないが、中井政喜『一九二〇年代中国文芸批評論』（汲古書院、05年）は前引の『『革命文学』論争覚え書』が相当部分を占めている。研究書ではないが大高順雄・藤田梨那・武継平訳『桜花書簡 中国人留学生が見た大正時代』（東京図書出版会、05年）も、日本留学時代の郭沫若が故郷・楽山の父母に宛てた書簡を訳したもので、貴重な仕事である。第1の例に数えることができよう。

第2の例としては、すでに紹介した研究者たちのほか郭偉、成家徹郎、小崎太一、岸田憲也のような人の名をあげることができる。第3の例としては、武継平（帰国）、藤田梨那、郭偉、顧偉良、賈笑寒（帰国）などが挙げられる。彼らはいずれも中国語を母語とするが、日本語に巧みであって、日本で研究者としての訓練を受け、現在は大学や研究機関に職を得て研究者として活躍している人々である。

第4の例の日本郭沫若研究会（会長岩佐昌暲、事務局は熊本学園大学）は2002年11月、北京で開かれた「郭沫若與百年中国學術文化国際論壇」に参加した岩佐、藤田、武の3名が同年12月結成した研究組織であり、日本国内の有力な郭沫若研究者を網羅している¹⁰。毎年1回会報を発行するほか、中国郭沫若研究会と連絡を保ち、郭沫若研究の発展のために努力している。毎年、会員を組織して中国の学会に参加している。会報は小さいものとは言え、郭沫若に関する論文、エッセイ、研究情報を掲載していて、郭沫若研究のセンターの役割を果たしている。08年9月には郭沫若の母校九州大学医学部において郭沫若九大留学90周年記念国際研討会を開催した。この国際学会に関しては日本郭沫若研究会の会報に詳しい¹¹が、中国、韓国から18名の研究者が参加、国内の研究者も含めれば総勢4

¹⁰ 日本郭沫若研究会については、岩佐昌暲「關於 日本郭沫若研究会」『郭沫若学刊』（四川郭沫若研究学会2005年第3期（総第73期））に紹介がある。

¹¹ 「[郭沫若九大留学九十周年記念 郭沫若研究国際學術集會]特集」（『郭沫若研究会報』11、09年）。また岩佐昌暲「福岡の文化遺産としての郭沫若—郭沫若国際学会を終えて」（『西日本新聞』08年10月日）もこの会議の総括的文章である。なお、現在、会議の報告論文集『郭沫若の世界』（仮題）の編集作業が進行中である。

0名が参集、合計27の発表が行われた。日中学術交流史においても画期的な学会であった。この会が今後も日本における郭沫若研究の中心的役割を果たすことは間違いないと思う。これに関連して同会は日本聞一多学会（理事代表・竹下、事務局二松学舎大学）と提携関係にあり、合同で研究会を開催したりしている。日本聞一多学会会誌『神話と詩』には郭沫若関係の論文も掲載されている。

終わりに

以上、日本における郭沫若の紹介・研究を概観してきた。郭沫若の作品が最初に日本語訳されたのは1919年、今年はそれより数えてちょうど90年になる。この90年間を振り返ると、学術的な意味での日本における郭沫若研究は彼の死後になってはじめて始まったように思う。確かに生前の郭沫若の文名は高く、彼についての言及も少なくなかった。だが『女神』の時期、彼が文学者として苦闘していた時期を除いて、それは彼の政治的身分、中国の政界や日中関係における彼の影響力と不可分のものだった。彼の高い文名は彼の政治的影響力に支えられていたと言って過言ではない。国民革命期以後、十年の亡命を経て、抗日戦争、国共内戦、新中国の建国、社会主義建設、文革という激動の中国史を彼はその先頭に立って生き抜いた。この全時期を通じて日本は郭沫若に注目してきた。だがそれは彼の「文学者」（それは時代と民族の良心を個人の名義で代表する者である）としての発言を聞くためだったろうか？そうではなく、日本が関心をもったのは「文学者」であり「政治家」でもある郭沫若の正体は何か、言い換えれば「郭沫若は誰か」ということではなかっただろうか？彼の逝去は、彼を政治的な影響力から切り離して、一人の人間として扱うことを可能にした。同時に彼の文学を客観的に見る条件を作り出した。自己批判によって下落し、新時期文学の高揚によって周縁人物となった彼の文学に、本当に関心を持つ者のみが、彼を研究対象に選ぶようになった。こうして研究対象としての人氣が落ち、研究する人が減少したにも関わらず、その研究の質は逆に高まっていくという逆説的な状況が生まれたのである。

日本における郭沫若研究は、今後、本当に関心を持つ少数の研究者によって担われるだろう。その結果、研究はますます細分化され、精緻に、実証的に展開されていくだろう。だがそれは人氣のあった時代の郭沫若研究がもっていた、郭沫若の全体像の追究という課題からは、いよいよ遠ざかっていく恐れのあることも、われわれは知らなければならないだろう。

個人的には、私はそれは避けたい。そしてそのためには、郭沫若の全体像を明らかにするという目標をおさえつつ、個別の実証研究を積み重ねていく、言い換えれば、個々の研究が目標追究のどこに位置づけられるかということをきちんと意識しながら研究をすすめる、そういう当たり前の前提を何度でも確認する必要がある、と考えている。（2009年10月）